

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集

「翔べ! 新・日系人」

- ・いつになったら陽が当たるのか—日系芸能人の憂鬱
- ・OAB雑感—ブラジル版司法試験に合格して
- ・ブラジルの日系画家

あの町この町

ジョアン・ペッソア



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

〔Business innovation-1〕

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

〔Business innovation-2〕

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

〔Business innovation-3〕

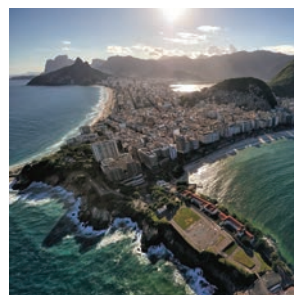
ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



目次

(あの町この町) ジョアン・ペッソア [イヴァン・マルケス・レアル]	3
(ブラジル・ナウ) 小池都知事へ勝手連のメッセージ [和田昌親]	5
【特集】翔べ! 新・日系人 いつになったら陽が当たるのか 日系芸能人の憂鬱 [アンジェロ・イシ]	6
【特集】翔べ! 新・日系人 OAB雑感 — ブラジル版司法試験に合格して [古杉征己]	8
【特集】翔べ! 新・日系人 ブラジルの日系画家 [田中慎二]	10
我がマンゲイラを語る [アルヴァロ・カエターノ]	11
連載・ブラジル現地報告 消えゆくコロニア語を惜しんで [深沢正雪]	12
(日系企業シリーズ・第44回) ブラジル東京海上 新たな、更なる挑戦へ [石丸正剛]	13
(ビジネス法務の肝) 企業犯罪と司法取引について [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ 認定通関業者制度について [加藤雅規/マルコ・クアドロス]	15
(連載エッセイ) 未来を見据える [呉屋春美]	16
(ウーマン・アイ) ブラジル人女性と日本の今 [寺本早苗]	17
(ジャーナリストの旅路) 五輪を彩った笑顔 [本池英人]	17
(連載文化評論) 遺伝学者による、ブラジル人種論の新展開 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識)「メダルの威力がブラジルを生き返らせた」	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとつ」
「先日、無事にオリンピック・パラリンピックを成功へと導いたりオデジャネイロ。美しい自然と人々の暮らしが融合するこの都市は、転換期を迎えるブラジルにおいて、今後も新たなエネルギーを創造し続けていくはずだ。」
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

ジョアン・ペッソア

ブラジルの歴史において州都としては三番目に古い町が、パライーバ州の州都ジョアン・ペッソアである。サルヴァドール、リオデジャネイロに次いで、1585年に創設されたので、旧市街には歴史を感じさせる史跡が、いくつもある。なかでも街の中心にあるサンフランシスコ教会は、1770年に創設されたバロック・ロココ式の建築で、その美しさと荘厳さは、フランスの美術史家ジェルマン・バザンによって、フランシスコ派の建造物としてはブラジルでも最も素晴らしい代表作品とみなされている。天井の装飾絵画はブラジル・バロック様式を象徴する重要文化財となっている。

このパライーバ州がもう一つ誇れるのが、南北アメリカ大陸で最東端に位置している、という地理的ポジションだ。一番東に位置するカボブランコ岬灯台は是非とも訪ねてほしい。なにしろ、アメリカ大陸で一番最初に日が昇る地点なのだから。

また、カボブランコには、「科学・文化・芸術センター」が2008年に竣工したが、これは晩年のオスカー・ニーマイヤーの代表作であり、パライーバ州民の自慢の種になっている。

ジョアン・ペッソアを代表する海岸といえばタンバウ・ビーチであるが、ここから2キロほどのところに位置するピカンジーニョは、岩礁に囲まれた天然プールで、干潮時には熱帯魚と戯れながら水遊びが出来る観光スポットになっている。

豊饒にして多様なパライーバ料理についてもちょっとだけ一瞥しておこう。内陸部料理の代表は、一日干しビーフとフライド・マカシェイラ(無毒マニオク)と地元産フェイジョン(インゲン豆)のコンビネーションだし、海産物料理ではペイシャーダ(ブイヤベース)か、はてまた、サヨリのフライか、いや、ロブスターも有名だ。地ビールならぬ地カシャサ(サトウキビ蒸留酒)を舐めながら、手作りチーズをつまめば、至福の時間がやってくる。

ジョアン・ペッソアは、住む人間にとっても観光客にとっても、魅力の尽きない町であり、日本の皆さんにも是非来ていただきたいと思っている。

イヴァン・マルケス・レアル
(NIAGRO 社代表取締役)



グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っていきます。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュラロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

小池都知事へ勝手連のメッセージ

小池百合子東京都知事はキャッチフレーズをつくる名人らしい。知事選では「緑一色」の姿で結束を示し、「都民ファースト」で一般人の心をくすぐり、「ワイズスペンディング(賢い支出。ケインズの言葉だが)」で都議を震えあがらせた。「語録」が残ることは政治リーダーの資質のひとつだから、滑り出しは順調だ。舛添前知事はリオのオリパラに行かなければ「死んでも死にきれない」と出席を熱望していたが、そんな“悪夢”を振り払う小気味良さだ。

僭越ながら、私たちブラジル勝手連グループは小池知事に「リオから何を学ぶか」をメッセージとしてお伝えしたい。

その1. 先進国の驕りを排す

上から目線の前知事と違って、小池知事は「選手目線」に立って教訓を得ようとしたと思う。間違ってもブラジルを見下さないでいただきたい。リオ五輪期間中、競泳で金メダルを取った米国のライアン・ロクテ選手が「偽証強盗」事件を起こした。夜中にガソリンスタンドのトイレを自分たちで壊して、ありもしない強盗事件をでっち上げた。それを日本の一部の新聞が「リオ、選手被害続出」とウソを上塗りした。

そのロクテ選手には反省の気配が全くない。ブラジル当局から訴追された(捕まれば禁固刑)にもかかわらず、9月半ばにABCテレビに登場、女性とダンスに興じている。そこをブラジル・ファンに見つかり、「恥を知れ!」と猛抗議を受けた。

若気の至りと許すわけにはいかない。「危険なブラジル」という噂を悪用した小賢い犯罪。アメリカ人の「先進国の驕り」が背景にあるだけに余計悪質だ。軽い犯罪が実は大きな禍根を残すロクテ現象のような事件は起こしてはならない。

その2. 発想を変える機会に

東京としては2回目のオリパラだ。1964年の初回は先進国の仲間入りを果たすきっかけとなった。先進国になった今、オリパラ旗を引き継いだ小池知事は「旗は重くなかったが、責任の重さはズシリ」。でも背伸びする必要はない。競技は選手が盛り上げてくれる。カイロ大学という途上国に留学し、テレビキャスターの経験もある小池知事は貧困層をたくさん見てきたはずだ。

ブラジルのファベーラ(貧民窟)への理解も他の政治家よりは深いし、一流都市の首長として「謙虚に、どっしりと」

構えていてほしい。言わずもがなの話だが、他国に尊敬される国は強い国ではなく「包容力とバランス感覚あふれた国」だ。金融センターとしての東京を再浮上させ、競争力のある東京を取り戻す時だし、課題は多い。豊洲問題も大事だが、世界を相手にする戦略策定を優先してほしい。

その3. ハートのバリアフリー

ブラジルで盛況だったのが意外にも障害者向けのパラリンピック。「リハビリからスポーツへ」——という素晴らしい標語を考えた人もいた。人種多様性に富むブラジル国民の得意技は人間に優しいこと。日常的に治安が悪いのは否定しないが、貧困とそれを解決できないのは政治の問題。しばらくブラジルで生活すれば、彼らの「難解な優しさ」がわかってくる。南米地域でシリア難民を最も多く引き受けているのがブラジルだ。IOC(国際オリンピック委員会)は今大会で初めて「難民代表チーム」を結成したが、その背景には人種差別が少ないとされるブラジルという舞台があった。五輪史に残る歴史的な出来事である。

珍しく日本のテレビでちょっといい話が紹介された。パラ会場のバリアフリーについてだ。選手用通路のスロープの斜度、手すりの位置などが正確に設置され、排水口のふたの網の目を小さくして、車いすが動きやすいように気を配っている。リポーター役の「嵐」の櫻井翔君はこれを称して「ハート(心)のバリアフリー」と名付けた。東京大会ではJRなどと協力してハード面の設備計画は進めつつ、気持ちのこもった「ハートのバリアフリー」を流行らせてはどうか。

その4. 本当のおもてなし

この「ハートのバリアフリー」こそ本当のおもてなしになる可能性がある。つまり、形ではなく精神。リオ取材記者のひとりによると、会場などで困った顔をしているとブラジル人がすぐに声をかけてくる。日本人の多くは東京駅の改札口で困った外国人を見ても知らん顔で通り過ぎる。本当のおもてなしとは何かと考えてしまう。丁寧に迎え、礼を尽くすだけでは足りないブラジル流おもてなしも参考になりそうだ。

いきなり東京オリパラ工事見直し問題に見舞われたが、あらゆる不祥事をきれいにする役目だから小池知事は何をやっても褒められる。リオから学ぶことはない、などと決して思わないでほしい。

和田昌親(当協会常務理事)

いつになったら陽が当たるのか 日系芸能人の憂鬱



アンジェロ・イシ
(武蔵大学教授)

やっぱり何も変わっていないのか…今年の8月末に開始したブラジルのGloboテレビ局のドラマ『Sol Nascente』を観て、憤りが入り混じった失望感がこみ上げてきた。詳しい説明はこれからゆっくりしたいが、結論を先取りするならば、まず、ブラジルのテレビの連続ドラマにおける日系人の描き方が変わっていない。次に、ブラジルのテレビ界全般における日系人俳優の起用法が変わっていない。そしてさらに突き詰めるならば、ブラジル社会における日系移民とその子孫に対する偏見が払拭されておらず、日系人のイメージが本質的なところでは向上していない、と思えてくるのである。

Globoは言わずと知れた、ブラジル最大のテレビ局である。そこで放送されるノヴェーラ(連ドラ)は数ヶ月間にわたって週6日、毎日1時間放送される。その平均視聴率は日本では想像し得ないほど高いもので、日本なら大ヒットとして称賛される20パーセント程度の視聴率は、この局にとっては死守すべき至上命令である。例えば夜9時台の最新作Velho Chicoの172話を通しての平均視聴率が28パーセントに留まったせいで、失敗作扱いされている。

さて、そのGloboが初めて日系移民を題材にしたノヴェーラを制作すると聞いて、多くの人が異なる理由で興奮しただろう。中でも、日系人のタレントや俳優たちは、晴れの舞台で主人公を演じられるかもしれないという一世一代のチャンスに胸を膨らませた。そして一般の日系ブラジル人は、その日系芸能人が画面で活躍するのを観るという楽しみに加え、どのようなストーリー展開やどのよう

な描かれ方をされるのか、興味津々になったに違いない。

むろん、日系人が脇役あるいはサイドストーリーという形でノヴェーラに登場するのはこれが初めてではないし、日系人の俳優が主演を獲得するのが史上初というわけではない。視聴者の記憶に鮮明に残っているのは2005年のBang Bangで格好良いjaponesa(ニホンジン女性)を演じたダニエリ・スズキだろう。ちなみにスズキは一流スターの座を射止めた報いとして、2009年放送のViver a vidaにおいて、全く「日本性」や「オリエンタル・フェース」に頼らないEllenという名の医師役を獲得し、好演した。

スズキは日系芸能人にとって新時代の申し子だったのか、それともたまたま日系というハンディを乗り越えて陽の当たる場所を勝ち取った例外なのか。今、話題をさらっている『Sol Nascente』(以下、『ソル・ナッセンチ』)をめぐる騒動を見る限りでは、彼女は何らかの成功の方程式を示したわけではなく、十年に一人の珍しい成功例に過ぎなかったのかもしれない。ではいったい、この作品で何が問題になっているのか。

昇らぬ太陽

『ソル・ナッセンチ』は日出ずる国(Terra do sol nascente)に由来する。まず注目したいのは、このドラマは日本や日系人のみを主人公に据えているわけではなく、日系移民の家族とイタリア系移民の家族の交流を軸としていることである。制作者側が、日系人だけでは視聴

率が稼げないだろうと、守りの姿勢で臨んだという様子がうかがえる。また、時代設定は「現在」で、移民に関する知識を深める仕掛けはない。これは以前、イタリア系移民の開拓時代を描いて高視聴率を獲得したTerra Nostra(1999～2000年放送)とは大違いである。

日系人の描き方もひどくステレオタイプ(固定観念)化されている。茶道や寿司や「侍精神」やお辞儀が不自然かつ誇張された形でセリフやストーリーに盛り込まれている。

しかし、最も問題視されているのは主役のキャスティングである。日系人一家の「家長」、カズオ・タナカ役は一旦は日系人俳優のケン・カネコ(金子謙一)に決まりかけた。カネコはチズカ・ヤマザキ監督の『ガイジン』にも出演している、長いキャリアを積んできたベテランである。ところが蓋を開けてみれば、東洋系の顔立ちには程遠いルイス・メロが抜擢された。メロはイタリア系とインディオ(先住民)の血を引くベテランの俳優で、その演技力には定評があるものの、カネコが大手紙『オ・エスタード』へのインタビューで皮肉っているとおり、「私にドイツ人を演じさせるのと同じような大変さを(メロは)味わっているだろう」と、居心地の悪さが拭えない。Globoはこの役柄は「日本人とアメリカ人の孫」と公表しているが、「それはメロが全く日系人っぽくないことを正当化するために後づけした屁理屈」という見方がもっぱらである。

タナカの娘でヒロインのアリセ役に人気スターのジョヴァンナ・アントネーリが起用されたことも物議を醸した。グ

ローボのサイトに掲載された脚本家の証言によれば、当初は日系人女優を予定していたが、「スズキと入れ替えたという報道は事実無根。彼女はヒロイン役ではなく、従姉妹役で出るはずだった」という。結局、理由は不明だが従姉妹役としても出演せず、若手の日系人女優がその役をゲットした。そして主人公については「実子ではなく、養子なので日本人の顔立ちをしていない」というのがGloboの説明である。

脚本家は奇しくも本音を露わにしている。彼曰く、「スター級の日系女優が見つからなかった。ノヴェーラはとにかくお金がかかるので、確実に視聴率を死守しなければならない。ジョヴァンナなら大丈夫だと思った。」

今回のキャスティングが騒動に発展した理由の一つは、日系、韓国系、中国系などの俳優から成る集団、Coletivo Oriente-se(Oriente-seは方向性を見つけるという意味だが、オリエンタル系を意味するOrienteと語呂合わせをしている)が声を大にして抗議したからである。団体設立の準備は今年の4月に始まったが、公式な設立はまさに『ソル・ナッセンチ』放送開始の翌日、9月1日であった。彼らは「オリエンタル系を外国人扱いするのは差別である。私たちは他のブラジル人俳優となんら変わりなく、どんな役でもこなせる」と主張する。それを証明するかのように、3人の日系人女優がマリリン・モンローに扮してい

る動画も公開した。

また、ユーチューブではYo Ban Booという匿名でSol Poente(沈む太陽)というお笑いコムの動画も投稿されている。これは明らかに問題のノヴェーラのパロディで、なんと、あのケン・カネコがいかにイタリア人の人物設定でスパゲティを豪快に食べるのである！

終わらぬ模索

実は『ソル・ナッセンチ』の主役にはカネコだけでなく、イタリア系と日系のいわゆる「ハーフ」のマルコス・ツムラも有力視されていた。しかし、彼は目立たない脇役にまわされる結果となった。

私はかつて、新世代の日系ブラジル人芸能人にインタビュー調査をして比較研究を試みたことがある(イシ2008)。そこでは4つの事例に注目したが、奇しくも、マルコス・ツムラを最も有望な芸能人として取り上げた。ツムラはブロードウェイ・ミュージカル劇のブラジル版の主役を立て続けに獲得していた。『レ・ミゼラブル』のジャン・バルジャン役を筆頭に、『ミス・サイゴン』のエンジニア、『美女と野獣』のリュミエールなどで主演した。演技力も知名度も揃っているにもかかわらず、Globoからすれば「まだテレビに顔を出していない」、「十分に知られていない」ことが不安なのだろう。よって、卵が先か鶏が先かのジレンマが繰り返される。実績がないからチャンスを与えられない、チャンスが永遠と回ってこないから次の機会にも実績がないという理由で除外されるわけだ。

これは何も芸能界に限られた話ではなく、ブラジルにおける日系人の位置付けを反映しているとも思える。政界では大臣や国会議員にはなれても、大統領候補にはさせてくれない。顔で勝負しない新聞の編集長にはなれても、テレビニュースのメインキャスターにはなれない。人気商売となればなるほど、「マス」の圧

倒的な支持が必要になればなるほど、日系人の出番は削がれる。

前述した論文で私が取り上げた他の事例は、東洋系であることを自虐的に下ネタにしてウケを狙っていたバゴージ(ふざけたサンバ)集団のゼン・ブラジル、演歌の歌姫のカレン・イトウ、そしてセルタネージャ音楽(ブラジル版のカントリーミュージック)の歌手としてブラジルのメジャーな芸能界で勝負しようと張り切っていたNHKの「のど自慢」のチャンピオン、ジョエ・ヒラタであった。ゼン・ブラジルは各テレビ局で「バカ丸出し」的な出演を繰り返した挙句、使い捨てられて解散した。カレンは昔も今も、あくまでも日系コミュニティのイベントで歌ってそれ以上の冒険を試みないという姿勢を貫いている。

興味深い転換を試みたのはジョエ・ヒラタである。私は最近、久々に彼に聞き取り調査を行ったが、彼は日系人に対するブラジル芸能界やメディア界の厚い壁に幻滅し、無理にセルタネージャで認められようというのを諦めた。かわりに、ブラジル各地でブームになっている「ジャパン・フェスティバル」を巡回してコンサートを開くだけでも大忙しの日々を送っている。ブラジルで日本のポップカルチャーのファンが増えるという「クールジャパン」の追い風で、各地の「日本祭り」の集客は急増中という。

「ビッグクラブで控え選手として我慢するか、小さいクラブでトッププレイヤーとして活躍するか。僕は後者を選んだ。」ヒラタは自分の方針転換をサッカーに例えて鮮やかに解説してくれた。ブラジルでの日系人に対する厚い壁にぶつかるのを避けたヒラタ、そしてその壁を突破しようと奮闘し続けるツムラやOriente-seの人たち。戦略こそ違えど、どちらにも陽の当たる日が来て欲しい。

参考文献
イシ、アンジェロ(2008)「新世代の日系ブラジル芸能人—そのキャリア戦略とエスニック・アイデンティティ」白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化』御茶ノ水書房。



アンジェロ・イシ教授と歌手ジョエ・ヒラタ

OAB雑感— ブラジル版司法試験に合格して

法律家の登竜門

日本の司法試験に相当するような制度として、ブラジル弁護士協会（Ordem dos Advogados do Brasil = OAB）が実施する統一試験「O Exame de Ordem Unificado」がある。

ブラジル国内で弁護活動を行う資格を得るための国家試験で、検事、裁判官などの公務員試験にも弁護士の資格が要求される。したがって、法曹界で生きていこうとする法学部学生にとっては、避けては通れない登竜門的な存在だ。

法科大学の評価は、もちろん OAB の合格者数に直結。各大学は学術的な研究より、OAB 対策へ走ってしまいがちで、大学院を持ちながら研究調査センターが機能していないところもある。

法学士で OAB の資格がなければ、俗に「paralegal」と呼ばれる。弁護活動そのものは許されず、弁護士のアシスタントに甘んじなければならならず、研修生やオフィス・ボーイをイメージされやすい。

したがって、各大学は 1 人でも多くの学生を OAB の統一試験に合格させようと躍起になるわけだ。

司法の危機

OAB の試験では、毎年 の定員数が設定されているわけではない。つまり、他の受験生と枠を巡って争うわけではない。一定の点数以上をとれば、みな合格する。誤解を恐れずに言えば、運転免許証というか営業許可のようなものだ。

私が受験した第 19 回 OAB 統一試験（2016 年 3 月実施）では、ブラジル全国で志願者数が 10 万 8335 人だった。第 1 次試験に合格したのが約 5 万 643 人、第 2 次試験にも受かったのが 2 万 6010 人だったので、志願者全体のうち 24.52% が合格証書を手にしたことになる。

正確な統計は手元にはないが、弁護士の数は現在 75 万人とも 90 万人とも言われる。法科大学の数はブラジル全国で 1000 を超え、数年以内には弁護士数が 100 万人を突破しそうな勢い。「石を投げれば、弁護士か歯医者に当たる」という笑話がある所以だ。

もっとも訴訟件数も莫大で、2013 年に様々なレベルの裁判所に計 9 千 540 万件の訴訟が持ち込まれたという。訴訟に係る経費、結審までの年月を考えると司法による救済は危機の状態にあると

言ってもよいかもしれない。

法科大学の増加で発生した問題は、教育水準や弁護士能力の低下だ。授業科目当てのいかがわしい大学が現れていることも事実だろう。法科を卒業すれば、「ドクトール」（先生）ともちはやされる時代は、過去のものになってしまうかもしれない。

教育省による法科大学への規制強化は、弁護士の権威失墜を懸念しての措置でもあろう。OAB の試験問題も年々厳しさを増している上、出題科目も多岐にわたってきた。以前廃止されてしまった、面接試験を復活させようという動きも出ている。

OAB の歴史

そもそもブラジルに法科大学が創立されたのは、1827 年のオリンダとサンパウロで、当初はエリート官僚を養成することが目的だった。実際の授業は、翌 1828 年にスタートした。

ブラジルが独立したのは、1822 年。憲法発布が 1824 年。独立国家として、国際社会の仲間入りを果たす上で、法科大学の設置は愁眉の的だった。

1843 年には、Instituto dos Advogados Brasileiros（IAB）が産声を上げ、法制や判例の研究や議論を通じて、司法制度の基礎づくりに参画。ブラジル地理統計院と並んで、国家アイデンティティー形成へも大きく貢献した。

現在のブラジル弁護士協会（OAB）が設立されたのは 1930 年になってからのことだった。この年、「貧民の父」（pai dos pobres）と呼ばれるジェトゥリオ・ヴァルガスが革命で大統領の座に就いている。

ヴァルガス政権を後押しした社会的集団の中に、ブラジルの近代化を望む若き

法科大学図書館の勉強風景



古杉征己
（サンパウロ人文科学研究所理事）

政治家や弁護士などの自由職業のエリートが存在していた。こうした層が、OAB を生む原動力になった。

資格試験の変遷

1930 年当時、弁護士になるには、法科大学を卒業して各地域の弁護士協会に登録するだけでよかった。1963 年になって、ようやく資格試験が導入されるも、資格試験は義務ではなく、法科大学最終学年で研修をすれば、資格試験を受験する必要なかった。

サンパウロ管内では、1971 年に資格試験がスタートした。試験は記述試験と面接試験に分かれ、記述試験では訴状作成、面接試験では試験 24 時間前に出題されたテーマについて、面接官 3 人の質問に答えなければならなかった。

学生にとって幸いだったのは、受験科目を選べたこと。数多くある科目から、興味のある科目だけ集中的に勉強すればよいからだ。

ブラジルの弁護士はどちらかといえば、特定の分野に特化したスペシャリストが多い。その背景には、資格試験のあり方に問題があるのだろう。

ただ当時サンパウロ市には、USP、PUC、MACKENZIE、FMU ぐらいにしか法科はなく、弁護士になる学生の水準にも今ほど大きなばらつきはなかったのではないだろうか。

1994 年になって、資格試験は弁護士になるための義務とされる。つまり、国内すべての地域で学生を完全にふるいにかけるようになった。そして、各地域バラバラに実施していた試験は 2007 年から統一して行われるようになった。

OAB の統一試験の歴史は、義務化された後から数えると、まだ 20 年余りの歴史しかない。

試験内容

OAB の統一試験は 1 年間に 3 回。第 1 次試験が 3 月、7 月、11 月ごろ、その 2 カ月後に第 2 次試験が実施される。

第 1 次試験は選択式問題が 80 問出題

され、5 割の 40 問正解すれば第 2 次試験へ進める。出題科目は憲法、民法、刑法といったいわゆる主要法典から、法哲学、消費者保護法、環境法、職業倫理法など幅広い。

ただ出題数の配分は、科目によって異なる。しかも、相対評価ではない。40 問正解したもの、80 問正解したものと同じ扱いだ。だから、受験生が将来進もうと考えている分野を徹底的にあらえば、第 1 次試験を突破するのはさほど難しくない。

第 2 次試験は行政法、民法、憲法、労働法、企業法、刑法、税法から一教科選んで受験する。10 点満点で、合格ラインは 6 点。5 点が訴状作成、残り半分が論述問題に充てられている。どちらかで満点をとっても、残りがゼロ点だと及第点には達しない。だから、バランスよく受験勉強することが重要だ。

いずれの問題も、正解の最低条件は法的な議論ができるかどうか。つまり、「X X 法第 X X 条によれば～」という法的根拠＋判例を示すことができるかにかかっている。出題文を読解して、該当する法文を探しあてればしめたものだ。

訴状作成には、学生の置かれた環境が大きく左右する。ブラジルの法学徒は半日法律事務所や企業の法務で就労もしくは研修し、残り半日を大学で過ごすのが一般的。日常的に、法律関係の書類に目を通し、裁判所へも通う。

よって、実務的な試験に強い。訴状作成といっても、その種類によって一定の書式がある。実務に携わっている受験生は、手が覚えている。理論しか知らない学生にとって、訴状のイメージや裁判の流れを掴むのは一苦労だ。

OAB の統一試験の難易度が、同団体の運営とも絡んでくると面白い。試験のレベルを上げてしまうと、合格者数が減ってしまい、その結果、OAB への登録等による会費収入が減少してくるからだ。年初めの 3 月がもっとも難しく、年の半ばが比較的簡単だといわれている。

法曹界へ入る弁護士の水準を保たなければならない一方、あまりに締め付けた試験にすると、団体の資金源を脅かし

ねないというのは、何とも皮肉な話だ。

OAB と日系人

第 19 回 OAB 統一試験において、サンパウロ市の受験者数は 3423 人で、約 4 割に当たる 1369 人が合格した。合格者リストで、日系人の名前を数えてみたらサンパウロ市では 45 人だった。割合にしたら、約 3.3% にすぎない。

日系人口が 160 万人だと推定すると、ブラジル人口に占める日系人口の割合は約 0.77%、190 万人だとすると、0.92% になるが、サンパウロ市の場合は、日系人口は 4 ～ 5% 前後と推定される。したがって、サンパウロ市の日系合格者の割合は日系人口に比べると、低い。

一般の弁護士に始まって、大学教授や裁判官など、法曹界で活躍する日系人の名前を身の回りで日常的に聞くので、この数字はかなり意外だった。

そういえば、私の大学のクラスでも日系人学生は約 80 人中 5 人。割合にして、6% 強を占めるにすぎない。この数字だけを見ると、司法を志す日系人は比較的に少ないことになる。

弁護士業務とは基本的に話すということ。法的議論はもちろんのこと、身振り、手振りを含めて、相手を説得するために、さまざまなパフォーマンスを展開しなければならない。

日系人はブラジル人に比べると、どちらかといえばおとなしいので、中々、司法の世界に食い込んでいきにくいのだろうか？ そもそも争いごとを、避けようとする日本人の特性なのだろうか？ 想像は、いろいろ尽きない。

もちろん 1 回だけの試験結果をみて一般化することは危険だが、日系弁護士の実態調査を実施してみるのも、日本人の民族的特質を把握し、日系弁護士としての役割を認識する上で面白いかもしれない。



ブラジルの日系画家

田中慎二
(元サンパウロ人文科学研究所理事、
「ブラジル日系美術史」著者)

ブラジル日系画家のバイオニア、いわば第一世代が画業の研鑽を目的にサンパウロ美術研究会（略称：聖美会）を結成したのが1935年、これを起点としてブラジルにおける日系美術の歴史がはじまる。しかし太平洋戦争の勃発によって、日本がブラジルの敵国となったことから、日系画家の活動は一時中断されるが、戦後間もなく再開され日系画壇が次第に形成されていった。

1951年にサンパウロ・ピエンナーレが開設される1950年代になると、ブラジルの美術界に活気が出ると同時に、日系画壇にも活発な動きがみられるようになり、世界の潮流となった抽象表現主義の流れにのって、ブラジルのアンフォルメルを代表する作家として間部学、大竹富江、福島近、田中フラビオら日系の抽象画家がブラジル画壇で脚光をあびる時代となる。

さらに1960年代になると、戦後の日本で前衛美術の洗礼を受けた若い画家や彫刻家の移住が目立ってくる。彼らは閉塞的な日本の美術界から、より開放的なブラジルの新天地に自由な活動の場を求めて移住した若い芸術家たちである。彼らの移住の目的に、サンパウロ・ピエンナーレ展が開かれていることも、理由のひとつに挙げることができる。



左から豊田豊さん、宮尾進さん、田中慎二さん
「ブラジル日系美術史」刊行記念会にて
写真提供：ニッケイ新聞

彼らの活動は、聖美会を中心として日系社会のなかで制作活動をしていた日系画家に強い刺激を与え、以後、日系画壇の推進役を務めることになる。この時期に移住してブラジル画壇で活動した多くの画家がすでに物故しているなかで、現在も日系画壇の牽引役を務めている芸術家に、若林和男、豊田豊、楠野友繁、金子謙一、近藤敏、越石幸子といった人たちがいる。

特徴的なのは、彼らは大半が帰化してこの国に永住し、あくまでブラジルを制作の場として活動していることだ。これはヨーロッパやアメリカで制作している日本人作家の大半が、日本を向いて制作活動を行なっているのに比べて、きわだった違いといえよう。「はじめから国際的な立場を自覚してスタートを切った」と語る豊田、「日本でやってきたことの延長で充分に通用した」と若林。日本では無名に近い存在だった彼らが、ブラジルでは早々にピエンナーレに出品し、活躍の場もブラジル国内に限らなかった。

戦後移住の芸術家の活動と同時に、二世層の台頭が顕著になってくるのもこの時期からで、1970年代からニューヨークを拠点に注目された奥村リジアをはじめ、福島タカシ、岡本アヤオ、金子タロウ、沖中ロベルトなど大学で美術や建築を専攻した二世美術家が登場してくる。さらに80年代から90年代にかけては、二世を含む三、四世層の時代となり、島袋アデマール、工藤ジェームス、大岩オスカルたちの活動が見られるようになる。

近年活躍目覚しいサンパウロ出身の日系二世画家、大岩オスカルはニュー

ヨークを拠点に日本、ブラジル、アメリカはじめ国際的に作品を発表。2008年にブラジル日本移民100周年を記念した日伯交流年事業の一環として、日本初の大規模個展「大岩オスカル・夢みる世界」展が東京都現代美術館で開催され注目されたが、現代ブラジル日系作家を代表する画家といえよう。

1952年に聖美会が主催してはじまった「コロニア展」は、18年間にわたる活動で、具象派や抽象派といった異なる流派の共存を可能にしながら、国際画壇に飛躍する日系画家を世に送った。こうした活動姿勢は一種の活動方針となつて、文協（ブラジル日本文化福祉協会）が主催して1972年からはじまるサロン文協にも受け継がれ、さらに工芸作家協会の「美術工芸展」、具象派グループの「美展」をも含む『文協総合美術展』として現在に至っている。作家自身が美術展を準備・企画し、審査員も兼ねるといったスタイルを60年以上にもわたって貫いてきたことが特徴で、こうした美術展はブラジルでは他に類を見ない。

現在ブラジル美術界における日系作家の評価は確かに高い。ただ日系と一口に言っても、幅広い資質をもっている作家が居並ぶ。創生期特有の情熱をほとばしらせたのが第一世代の初期移民作家たちだ。戦後の抽象表現主義を実践した第二、第三世代は、ピエンナーレなど多くの国際美術展に出品するなど、ブラジル画壇の表舞台で活躍した作家が少なくない。さらに第四世代ともなると、手法や制作も多様化。日本の美学の遺産を受け継ぎつつ、世界の現代美術の潮流のなかでしのぎを削っている。

我らがマンゲイラを語る

編集部註：リオの名門サンバ・チーム、マンゲイラの会長を二期(2001年～2006年)務めたアルヴァロ・カエターノ氏が、エスコーラ・デ・サンバ・サウージの招待で初来日されたので、8月25日、弊協会で講演会を行った。聴衆の心を揺さぶったアルヴァロ講話の要旨をここに掲載する。尚、通訳は国安真奈氏

わがマンゲイラは、リオのカーニバルでは19回も優勝しているが、カーニバルにおけるマンゲイラのパレードには、15年前から、日本人の隊列が参加しており（註：細川多美子さん率いるBumba隊列のこと）、また、日本には、マンゲイラ大使（松下洋一郎さん）もいれば、姉妹サンバ・チーム（例えば、石山和男さん代表の、エスコーラ・デ・サンバ・サウージ）もある。このように日本との関係も浅からぬマンゲイラについて、これから語っていききたい。

配布資料とかは、全く準備していないが、私が心の中に浮かぶことを、即興で自由に喋りするスタイルのほうが、皆さんに、マンゲイラというサンバ・チームがどんな活動をやっているかをお伝えできると思うからだ。

まず、少々歴史のお話から。リオのエスコーラ・デ・サンバの創設時期からいうと、一番古いのが、デシヤ・ファラル（Deixa Falar）で、二番目がボルテラ（Portela）となり、わがマンゲイラは三番目に古く、1928年に創設された。正式な名前は、少々長くて、エスコーラ・デ・サンバ・エスタサウン・プリメイラ・デ・マンゲイラだ。リオのセントラル・ド・ブラジル駅からだと最初の駅なので、「第一の駅」が正式名となった次第だが、レクリエーション・クラブとして発足したのだ。

創業者といえるのは7名だが、なかでも、サンバ創成期の名物歌手カルトーラが一番有名で、創立の時不在だった作曲家カルロス・カチャーサも実質的な創業者だ。

当局から禁止され抑圧されていたサンバが、1930年代になって認知され、いくつものサンバ・チームが生まれる。カーニバルでパレードを競い合うコンテスト方式になってから、マンゲイラも成長してきた。創立時の7名で始まり、そこから80名、100名の段階を経て、現在の会員数は、5千人となってきたが、分水嶺といえる年は1984年だった。

当時のプリゾーラ州知事の決断のおかげで、サンバ・パレード専用固定会場サンボドロモが竣工した年で、マンゲイラは、スーパーチャンピオンになったのだ。（当時は、日曜日のパレードと月曜日のパレード、それぞれが別のコンテストとなっていて、マンゲイラとボルテラがそれぞれ優勝し、その次の土曜日に、二者対決して、マンゲイラが総合優勝した。）

さらに、サンバ活動に加え、「公民権プロジェクト」と呼べる社会包摂活動を開始したのが1987年であった。ドラッグに走ったり、組織犯罪の下っ端に組み込まれたりしていたファヴェーラの子供たちの人間性回復を目指すもので、まずは、スポーツ振興から入っていった。それまでは少年サッカーなどは高架道路の下スペースでやっていたのだが、いつかリオでもオリンピックが来るだろうと期待して「マンゲイラ・オリンピック村」を1987年に創設した。（当時は2004年にリオ五輪を招聘しようとの期待を込めて命名した。）

これは45,000平方メートルという広大な土地に、競技場、プール、学校（保育園から大学まで）、保健センターなどを配置した、総合社会センターといえるものだ。子供たちが、このオリンピック村で、勉強し、スポーツも音楽も楽しめるように、環境を整えてきた。米国のビル・クリントン大統領（当時）も、我々のプロジェクトを訪問して支援

アルヴァロ・カエターノ（マンゲイラ元会長）



してくれたが、これは我々の誇りである。

私は、“Escola de Samba(サンバ・スクール)”が“Escola de Vida(ライフ・スクール)”に自己変革してきている、と思っている。

このマンゲイラ総合社会センターで学ぶ生徒の数は、のべで2万人におよび、今回のリオ五輪に出場した選手のうち7名がここ出身であり、カンデラリア教会前の聖火台に聖火を運んだ14歳のラスト聖火ランナー、ジョルジ・アルベルト・ゴメスもマンゲイラ出身だ。

さらに、新たな「文化プロジェクト」として取り組んだのが、有名歌手アルシオーネの支持を得た「明日のマンゲイラ」と名付けた子供向けエスコーラ・デ・サンバで、1987年の創設以降、多くのパーカッショニストはじめサンバ・エンターテイナーが巣立っていった。

冒頭でお話した如く、日本でもマンゲイラの姉妹チームが活動しているが、カナダ、イギリス、オーストラリアにも同様のチームが活躍しているので、マンゲイラのサンバ活動は国境を越えている。

マンゲイラのチーム旗の色は、Rosa(バラ色)とVerde(緑色)だが、それぞれ、Amor(愛)とEsperança(希望)を意味している。このメッセージをお伝えして、私の結語としたい。



消えゆく コロニア語を惜しんで

深沢正雪
(ニッケイ新聞編集長)



2000年頃にNHKがブラジルでも見られるようになってから、コロニア語（日系社会の日本語方言）が一気に減った。かつては「ヨは～」と自分の事を指す人があちこちにいたが、今はほぼ絶滅。EU（一人称）が訛って「ヨ」になったという話だが、どこか「高貴な人」っぽく聞こえるユーモラスな響きが好きだった。

ブラジルは「伯国」、サンパウロ州は「聖州」、リオ・グランデ・ド・スル州は「南大河州」、マツト・グロッソ・ド・スル州は「南麻州」という具合だ。日本では「ルセフ大統領」だが、当地ではジウマだった。

日本移民団地を示す「植民地」という言葉も、日本国内では帝国主義的な意味でとられがちだ。でも、そこから「入植」（植民地に入る）、「退植」という表現に広がる。大農園のことを「耕地」と表現して「入耕」「退耕」「脱耕」（契約途中で耕地を出ること）などと派生する。

今では殆ど使わないが、かつては「火酒」（アルコール度の強い蒸留酒、焼酎など）と当地でいえばピンガを意味した。面積の単位を「域」と書いて「アルケール」（2.4ヘクタール）と読ませた。通貨単位には「釐」を使った。日本なら「カン」と読むが、日系社会では「ミル」（1000の意）と読ませた。金ヘンに千でミルだから、よく考えたものだと思える。

私が邦字紙で働き始めた1992年、コロニア語に慣れるのに3カ月かかった。東洋街で戦後移民に道を聞いたら、「その

邦字紙読者は、自分が日本を出た50、60年前の日本語を大事に守り続けている。その結果、弊紙の日系社会面ほど英語のカタカナを使わない紙面は珍しいはずと妙な自負をしている。

コロニア語は、日本語表現だけれども、ブラジルの感覚やセンスがしみ込んだ大陸の日本語、になっている。

それが、本紙サイト、ヤフーニュース、グノシーなど、本紙が記事提供する媒体を通じて、日本の読者に晒され、「これは大正時代の新聞か?」「聖州とは?」「15レのレってなんだ」（レアルの略）という反応が続々と書き込まれている。

この傾向は、ブラジルへの注目が高まったリオ五輪の最中、とくに顕著だった。ヤフーニュースに出した本紙記事で、36万ビュー越えたものが2本あった。2万ビュー越えても10本以上あった。印刷版が1万部しか出ていない邦字紙の記事が、ネット上では36万人の日本人の目に触れている。かつてない異常事態だ。大半のヤフー読者は、我々の記事も日本語だから日本の媒体と誤解して読み始め、所どころ出てくるコロニア表現に面食らっている。

ブラジルの新聞で日本に関してアルキペラゴarquipélago（諸島）という表現に出くわして、最初ハツとした。私は静岡県出身だが、「島に住んでいる」自覚がなかったことに気付かされたからだ。日本の人の大半は、口では「島国根性」とか自嘲的表現を使うが、実は「島に住んでいる」とリアルに自覚している人は少ないと思う。

日本の日本語との微妙なずれという意味では、島国感覚にもいつも頭を悩ませている。「ブラジル人に高まる海外旅行熱」という原稿があって、よく見ると旅行先にアルゼンチンやチリが入っている。欧州は大西洋を越えているので「海外」だが、北米は地続きといえなくもない。

つまり、「海外」という言葉には、「海の向こうは外国」という島国感覚がまつわりついている。陸続きに隣国がある大陸にはそぐわない。弊紙では極力「国外」とか「外国」に言い換える。本紙で「海外」という言葉を使う時は、「日本から見て海外」という意味だ。「海の外＝外国」という感覚は、日本語の中に染み付いている。日本以外で日本語が生活言語として使われていないことが、その主たる原因ではないか。

大陸で数万人規模の永住者によって日本語が日常的に使われている場というのは、世界的にごく稀だ。コロニア語がどんどん消滅していくのは、もったいない気がする。「大陸の日本語」感覚が、いつか日本にフィードバックされれば、より「グローバルな日本語」に一步踏み出すのでは一などと勝手に夢想をするのは、井の中の蛙たる邦字紙記者の傲慢さゆえかもしれない。

ブラジル東京海上 新たな、更なる挑戦へ

石丸正剛
(ブラジル東京海上
最高財務責任者)



今日、ブラジル東京海上は従業員1750名を有しブラジル全土に72の拠点を展開、競争の激しいブラジル保険業界で外資系No.1の地位を占める、リテール・企業分野両面における業界トップクラスの保険会社となっている。また、世界50ヶ国以上で「働きがいのある会社」ランキングを発表している世界最大級の調査研究機関Great Place to Work社により、2016年度「ブラジルにおける働きがいのある会社」大企業部門8位に選ばれ、名実共にブラジルに根ざした日本企業として大きな発展を遂げている。しかし、今日に至る道のりは決して平坦なものではなかった。

創成期～アメリカラチーナ社へ

東京海上がブラジルで産声を上げたのは今から57年前、1959年に遡る。英国Yorkshire保険会社の代理店として、リオデジャネイロそしてサンパウロの同社支店内にスペースを借り受け、ブラジルにおける事業を開始した。当時は進出日系企業の数も限られており日系ビジネスだけでは食べていけないことから、日本と異なる商慣習に苦労しながらも日系以外のお客様との取引も少しずつ増やしていった。

その後1969年には東京海上ブラジル支店として自前の営業を開始、1972年には、19世紀末創業と古い歴史のあったVarejista社を買収した。そして翌年両社を統合してアメリカラチーナ社を設立、現地法人としての営業を開始し、今日に至る保険会社の礎となった。それでもまだよちよち歩きであった黎明期の東京海上であり、その後の発展は日系移民のブローカーの方の多大なサポート、また日系移民・ブラ

ジル人の社員の献身的な貢献無しには成し遂げられる物ではなかった。

一方、その間1972年には、本店機能に移転したばかりの当時の超高層建築であったアンドラウスビルで大

火災が発生し、殆どの従業員が屋上からヘリコプターで脱出して九死に一生を得るという事件が起きた。しかしながら、恋人を助けにビル内に戻った1名の従業員は残念ながら命を落すという痛ましい最期となった。

Real Seguros 買収～その後の苦難

アメリカラチーナ設立後、1979年にはTreze de Maio本社ビルを建設し、80年代半ばから90年代初めにかけてのハイパーインフレの時代も何とか乗り越えてきた。が、一方で銀行系保険会社が大きな力を持つブラジル保険市場での単独での成長に限界も見え始めた。そこでブラジルでの更なる成長を図るため、2005年にはReal銀行(当時)の保険子会社であり業界大手の一角を占めていたReal Seguros社を買収、現在のブラジル東京海上の事業基盤が作られた。

買収後、事業は順調に進むかに見えた。しかしながら、旧アメリカラチーナ社とReal Seguros社の社風の違い、買収時には想定していなかった様々な事象の発生により、両社の統合は困難を極めた。数年に亘る赤字決算も余儀なくされ、サッカーのワールドカップやリオ五輪の開催が決まるなどブラジル経済が絶頂期であった2000年代後半から末にかけ、成長を犠牲にして基盤整備を最優先するという厳しい決断を迫られることとなった。その間、コスト削減のための従業員解雇だけは最後まで行わなかった。これは、人財が最も大切な財産であるという東京海上の価値観である。

この方針が全ての社員に受け入れられた訳ではない。去る者も出た。しかし、この新しいブラジル東京海上を創るという航海の先にあるもの、この苦難の荒波の向こう側にあるものを皆が共有し、その目的に向かって志を一つにして一つ一つハードルを乗り越えていくという途方も無いチャレンジに、残った全社員が臨んだ。

そして今～更なる挑戦へ

2012年、漸く準備は整った。数年に亘る試練の期間を経て、蓄えてきたエネルギーを成長へのチャレンジに向けて掲げるときが来た。2013年には社長のポジションを日本人駐在員からブラジル人へ移譲し経営のローカル化を一段と推進、同年には2社の法的合併も完了した。業績は順調に回復し、2012年からの3年間で事業の倍増を実現した。

今、ブラジル経済は未曾有の経済不況に見舞われており、保険市場もその例外ではない。成長性の鈍化、収益性の悪化は主要な保険会社を全て直撃しており、ブラジル東京海上もまた新たな苦難に直面している。しかし、ブラジルという世界有数の将来性を秘めた巨大な市場において、我々は日本発のブラジル企業として、国また市場の成長に微力ながら貢献し、従業員やお客様と共にこれからもチャレンジし、挑戦し続けて行く。

一九一七年の蝗害、一九一八年の旱魃と、災厄瀕りに襲い来つて、平野植民地の草創時代は、まことに血と涙に彩られたが、植民者は平野氏を中心に唇をかみつゝ開拓事業に献身し、大平野植民地を完成、更に隣接地三千域を増設して第二平野植民地の開拓を了するなど、氏の遺志は同志に継承された。

平野氏逝いて四十年、氏に對する敬愛の情は、今日も尙依然たるものあり、二月六日のその命日には、植民地在住者の老幼男女が墓前に集り、万葉の如き蠟燭は墓碑を繞つて終日絶えず、平野さんはこれがお好きぢやつたと、一人々々が火酒の瓶を傾けて墓石に注ぎ、謝恩、慰霊の手向けをするという美しい習慣をつづけている。

企業犯罪と司法取引について

いささか旧聞に属するが、本年5月、ペトロプラス汚職事件捜査（洗浄作戦）においてペトロプラス子会社元社長のマシャード・トランスペロ（元上院議員）と連邦検察庁の「司法取引」による供述が承認された。遡る3月には、ブラジル最大の民間企業であるゼネコン、オデブレヒトのオーナー、マルセロ・オデブレヒトが禁錮19年4ヶ月の有罪判決を受け、全面的な捜査協力と司法取引に応じることを表明した。政党や議員への違法な献金が暴露され二重帳簿も差し押えられた同社は、洗浄作戦での追及のために新規工事の受注が途絶え、借金も膨大となったために企業存続すら危惧される状態との報道がなされた。

英米法と大陸法

犯罪の増加に伴い処理すべき事案が増大すると、司法は刑事事件の迅速な終結により持てる資源を有効活用し、裁判所の負担を軽減しようとする傾向がある。司法取引を採用している代表的な国は米国であるが、犯罪件数が多いため大多数の刑事事件において公判審理を経ずに有罪答弁によって科刑が決定されている。司法取引が多く行われているのは、被告人により罪状認否の制度が存在する英米法に基づく諸国である。ブラジルの法制度は、英米法（判例の積み重ねが先例となり、判例法を具体的な事件に適用する）を基礎としておらず、ドイツ・フランス・イタリア等と同様、大陸法（ローマ法を起源とする欧州大陸に特徴的な法体系で条文規定からなる成文法）の系統にあり、ブラジル法の主たるルールは成文化の上、規定されている。

司法取引の考え方と導入

米国の司法取引は、自らの罪を認める代わりに、起訴の免除や量刑の軽減といった利益が与えられる「自己負罪型」、共犯者を含む他人の犯罪捜査や訴追への協力により、前述の利益や供述を不利益にされない利益を与えられる「捜査・訴追協力型」のふたつに分類されるが、このふたつが併用されることも多い。

ブラジルで大統領や大臣を含めた連邦議員を裁くのは最高裁であり、司法取引証言を承認し、その内容を知る立場にあるのは最高裁と連邦検察庁関係者のみと



松田純一
(弁護士。松田総合法律事務所所長)

連載

ビジネス
法務の肝

される。今回の司法取引の内容は明らかではないが、容疑者の言い分を受け入れ、法人への訴追の回避も可能となる司法取引の承認と引き換えにしても事件の早期解決を目的としたと言える。

一方、日本では本年5月に司法取引の導入を含む改正刑事訴訟法が成立し、法律の公布後二年以内の施行が予定されている。「自らの犯罪」を認め、捜査への協力により法人の刑事訴追の免除を含む刑の軽減がなされる米国やブラジルの例と異なり「他人の犯罪」を明らかにした場合に限定されたが、ここでの「他人」には共犯者が含まれ、企業にとっては役職員も「他人」に含まれる。従い、企業と役職員間、役職員同士の利害対立には注意が必要である。

司法取引は、各国の法制度や文化差異も踏まえて、その内容と運用が異なるが、関係者が多岐に亘り構図も複雑な企業犯罪では、企業が「自らの犯罪」を取引材料としてリスクを最小限とし自浄作用も期待できる。司法取引の導入が進めば企業犯罪摘発を巡る状況が変わっていくであろう。

今後のブラジルへの期待

汚職は企業家精神の毀損、企業間競争の劣化、費用の増大、財政支出の劣化等の悪影響だけでなく、国内投資、海外からの直接投資にも中長期的に打撃を与えるため、国家の経済成長率を低下させる要因ともなる。グローバル化と情報化が進展する今日、不正腐敗によるダメージは計り知れない。

著名なNPO、トランスペアレンシー・インターナショナルが発表した調査結果（2015年版）では、ブラジルの腐敗問題のレベル係数は、世界147カ国中76位であり、同じく南米のウルグアイ（21位）、チリ（23位）よりはるかに低い。汚職問題は根深いが、洗浄作戦への真剣な取り組みが効果を上げて企業の自浄作用と公務員の倫理が高まり、その結果を国際社会にアピールできれば、経済成長を後押しする要因となろう。

国際通貨基金（IMF）が7月に改訂した経済成長率見通しでは、ブラジルの2016年はマイナス3.3%、2017年はプラス0.5%と発表された。来年は深刻な不況から確実に脱出し、この予測を上回ってもらいたいと願っている。

認定通関業者制度について



加藤雅規
(PwC税理士法人パートナー)



マルコ・クアドロス
(同ディレクター)

ブラジルの税務当局は、ブラジルの国際貿易収支を促進するためには、より効率的な関税制度が必要であることを認識している。そのため、認定通関業者制度 (Authorized Economic Operator, AEO 制度) が、より迅速な通関手続を推進し、納税者に税務メリットを付与するため導入されている。AEO 制度は物理的な積荷と関税コンプライアンス (法令遵守) に関心が高く、運営上のリスクが低い国際的な貿易を行う者に便益を付与するものである。

制度のあらまし

AEO 認定の申し込みは任意であるが、AEO 保有者として認定されたものは、いくつかの運営上の選択により、顧客や当局に対し、企業の信頼性を表明する AEO シールの使用等のメリットを受ける。AEO 様式において認定者に対する一般的なメリットは次のとおり。

- ・相互認証協定 (MRA) によるメリット
- ・ブラジル連邦税務当局との独占的対話ルート
- ・AEO 認定者として会社のイメージと評判の改善
- ・他の様式や制度の他のレベルの認定において検討の優先
- ・AEO フォーラム、AEO ブラジルプログラムの改善のためのトレーニングやセミナーへの参加
- ・特別な関税制度の申し込み時、AEO申請で満たされた要件の免除
AEOとして認定された全ての者に対しての上述のメリットに加え、AEO-C、AEO レベル1 及び AEO レベル2 と認定されたものに対しては、次のようなさらなるメリットが付与される。
- ・協議ルートとして選択される積荷の割合の削減
- ・輸出申告の登録後、迅速なパラメータ化
- ・通関のために選んだ輸出申告の優先的検討
- ・運送者が AEO として認定されている場合、通関特別制度における担保の免除
- ・40 日以内の関税分類のルーリング
- ・経済的使用目的のための一時的輸入制度における担保の免除
- ・迅速なパラメータ化のメリットとして積荷がブラジルに到着前に、輸入申告の登録の許可
- ・一時的輸入を行う際、グリーンルートとして実物及び書類上の検査がない可能性

適格性及び認可の要件は、以下の通りである。

- ①通関登録におけるコンプライアンス (法令遵守) の履歴
- ②法人納税者番号と2年超の連邦税の支払の実績
- ③ビジネス、会計、財務・運営管理におけるコンピューターシステム

- ④電子税務ドミサイル
- ⑤物流チェーンのセキュリティを維持し、改善するための財務健全性
- ⑥ビジネス上のパートナー選択や人事の方針
- ⑦特別な分野において運営する免許

また、ブラジルの AEO 制度に申請できる業者は輸入業者あるいは、輸出業者、通関管理下にある商品の保管人、港や空港のオペレーター、運送者、通関業者、貨物運送のフォワーダーである。

ブラジルの通関環境に精通しているものの場合、ブルーラインプログラムと主に何が違うのか疑問に思うかもしれない。ブルーラインプログラムはブラジルの税務当局により以前に導入されたプログラムで、税と関税のメリットを与えている。違いはいくつかある。

- ・ブルーラインが、10,000,000 レアル以上の資本をもつ輸入業者と輸出業者で、より多くの取扱量がある輸入業者と輸出業者にのみ適用されるのに対し、AEO は、取扱量や資本の金額に関わらず、国際的な輸出入業を行う各者に適用される。
- ・ブルーラインは、国のプログラムであるのに対し、AEO は、世界公認である。
- ・ブルーラインの優先的通関手続は、ブラジルの Revenue Services に独占的に付与されているが、AEO は (2017 年から導入される) 全てのエージェンシーに優先的通関手続を付与している。
- ・ブルーラインは3年毎に更新されるが、AEO は、2年ないしは5年毎に更新される。

結論

膨大な量の国際的な貿易取引のある納税者は、AEO 制度により、税金の面だけでなく、物流の観点からもメリットを受ける。よってビジネスの観点からも当制度への参加を検討するのがよいと思われる。また、カナダ、アメリカ、イギリス、スペイン、ドイツ及び日本など、いくつかの国は、すでに AEO 制度を導入している点も、重要である。そのため、ブラジルでの導入は、当該導入国とのビジネスを促進することになる。

(2016年7月号に関する注記)

2016年7月号の非居住者に対するブラジルでのキャピタルゲイン課税の記事について、ブラジル非居住者のキャピタルゲインに対して適用される新しい税率が、いつから施行されるか明らかではなかった。これに関して、2016年4月29日に、解釈宣言法 (Interpretative Declaratory Act) 3/2016 が発行され、ブラジルの連邦税務当局は、累進税率を2017年1月1日より適用する点を明らかにしている。

未来を見据える

呉屋春美

(ブラジル日本文化福祉協会会長)



この先2年後、ブラジル日本移民は110周年を迎えます。日系社会にとっては1つの大きな節目であり、社会全体の未来を見据える上では極めて重要なタイミングといえます。

現在のブラジル日系社会は190万人を越えるまでに成長し、日系人の世代は7世までが誕生。この状況下において課題となるのが、この国の「日本文化」をどのような形で次世代へ伝えていくかにあります。日本文化の原点は言うまでもなく「日本」にありますが、ブラジルで育まれた日本文化はコーヒー耕地で働いた初期移民が起源であり、紆余曲折を経て今日に至ります。

移民当初、お米は大変高価な食品とされ、日本料理の基本調味料は入手することができず、自分たちが慣れ親しんだ日本食を食べることはままならない状況でした。その過酷な環境下でありながらも、日本移民はブラジル文化への同化ではなく、いかに日本人型の食生活を復活させるかを適応プロセスとしました。

米は白飯ではなくインディカ米、味噌汁の代わりは肉汁からとった塩汁でした。現地で取れたフェイジョン(インゲン豆)はアクだしをして甘い煮豆とし、また小豆としてアンを作ったり、代用味噌や醤油の原料としても利用しました。マンジョカ(キャッサバ・マニオク)は団子や薄切りにし日乾してから油で揚げて食べ、フバー(トウモロコシ粉)は小麦粉に混ぜて団子にして蒸し、米ぬかの代用として糠味噌にしました。先着移民であったイタリア系やヨーロッパ系移民、ブラジル人労働者から様々な技術、知恵、知識などを習得、吸収しました。それは食事のみならず自分たちの生活全般に適用し、創作工夫を凝らし生活力を向上させていきました。

日系社会には何かを吸収しようとする姿勢、モノづくりや集団能力の高さなどといった日本人古来の特色があり、今日も顕在しています。しかし、ブラジルにある日本文化は上記の要素を取り入れながら進化した文化であることは、あまり多く認知されていおりません。

ブラジルは「人類の坩堝」と言われておりますが、時代の

変化によりどの民族も現在はブラジル人。現在、日系人の世代も2世から4世が社会の中心となります。容姿は日本人といえど、精神や文化、生活習慣はブラジル人そのもののものです。現地の社会に適して生活する以上、これは極めて自然な流れといえます。

一方で日本語能力に長け、生活習慣や礼儀作法など日本特有のわびさびを身につけている日系人も存在しています。これは現地で日本文化を継承してきた家族や日本文化の接点によるものといえます。和食やアニメなどの流行、ブラジルに戻った出稼ぎ子弟の存在もその一つといえるでしょう。

日本文化の継承と普及を促進する理念を掲げる当会と致しましては、多角的な観点から上記の流れを柔軟に汲み取り、ルーツである「日本」を思い、このブラジルに日本文化を築き上げられた移民移住者の方々、子孫ならびに日系に携わる全員に敬意を払い、一人一人が既存のブラジル日系社会の現状をよく理解することが基本であると考えます。

文化の継承と普及を促進するにあたり、両国にとって4世以上となる日系人は未来の架け橋となる明るい存在であり、無限の可能性を秘めています。日系社会の将来を見据える中で、私共はその4世以上のビザ発行について再認識する必要があるとおもわれます。

1990年の入管法改正によって、日系3世が定住者として日本に行くことができるようになり、1991年には8万4千人の日系人が洪水のように押し寄せました。この30年の間で約60万人近くの人々が日本とブラジルを行き来し、ブラジルの日本文化は再び力強さを取り戻すことになりました。

今後も、私共のブラジル日系社会は日本との間の交流を継続したいと考えています。日系社会は、全ての世代を併せると、現在ブラジルにはおよそ190万人の日系人が暮らしています。その中で、日系人定義の拡大は緊急の課題なのです。

日系人は日本をより良く理解し得る外国人としての側面を有しています。2世や3世と変わることなく日本を強く想う気持ちは日系4世以上にもあり、激動する国際社会の中で、両国の親善、相互理解と協力を促進する無限の可能性を秘めていると、私は心から信じております。



ブラジル人女性と日本の今

ある大都市郊外の住宅街——。窓から女性が外で遊んでいる子供たちに向かって「夕飯ができたよ。早く帰っておいで」と叫んでいる。別の窓からは、これから買い物に出かける夫らしき男性に向かって「ミルクを買うのを忘れないでね」と妻が声をかけている。交差点の近くでは二人の女性が真剣に何かを語り合っている。今晚のドラマの行方なのか、最近の物価高の愚痴のこぼし合いか。バスが停まり、オフィスレディーらしき女性が降りるやいなや早足で家路を急ぐ。一日中仕事をして疲れている様子だが、帰宅したらまだすることがたくさんあるのだろう。

日本のどこでも見られる風景だ。この点に関しては、ブラジルも全く同じだ。多くの日本人は外国の人たちは全く異なる生活をしているように思うようだが、実際にはどこでも女性は常に忙しく、日常生活は日本でもブラジルでもさほど変わらない。

日本とブラジルの女性の状況を国連開発計画(UNDP)のデータを基に比べてみよう。UNDPは男女平等を実現することを目指している。しかし、実際にはまだ女性の所得は男性に比べかなり低い。2015年の平等性ランキングデータによれば日本は世界26位にとどまっているが、ブラジルは更に格差が大き

ウーマン・アイ

寺本早苗

(Comunicativo.Co.Ltd 社長、CCBJ 事務局長)

く188カ国中、97位となっている。女性の主な就職先が低賃金のサービス業だからだ。

女性の労働市場進出に関しては、ブラジルが59.4%、日本が48.8%となっている。世界平均が50.3%であることを鑑みるとブラジルの女性進出の方が進んでいるように見える。先進国の中でも北欧のように女性進出が目立つ多くの国が存在しているが、世界規模では新興国の方が軒並みに高く位置付けられている。それには理由があって、男性の収入だけでは生活が厳しいことを反映している表れだ。

駐日ブラジル大使館ではブラジルから来日した多くのミッションをアテンドしているが、訪問団には必ず女性が含まれており、多くの場合女性が団長を務めている。その訪問団を迎える日本側のメンバーは相変わらず男性のみである。その点ではブラジルの方が女性の管理職が多いように見える。ブラジルの前大統領が女性であったことも忘れてはならない。日本でも東京都知事や最大野党の党首が女性であることを踏まえ近い将来女性の総理大臣が誕生することも期待されている。日本女性の社会進出はこれからだ。

ジャーナリストの旅路

五輪を彩った笑顔

人生初の南米訪問となったリオデジャネイロ五輪取材の出発前、友人からは「生きて帰って来いよ」と半ば本気で心配された。何を大げさな、と思う半面、ワイドショーをはじめとした様々なメディアがジカ熱や強盗被害の不安をこれでもかと煽っていた報道の過熱ぶりをみると、無理からぬ反応とも感じられた。

お節介なほどの報道の予先は、開催準備の遅れにも向けられていた。試合会場が粗悪だとか、周辺にゴミや工事器具が散乱しているだとか。心配性の日本人としては不安の種を見過ごせないのかもしれないが、それらはほとんど粗探しのようなもの。いざ開幕してみると五輪公園内は綺麗に片付けられていたし、設備に不都合を感じることもほとんどなかった。もちろん、1カ月余りの滞在期間中に身の危険を感じたことは一度もない。

大小のトラブルがなかったわけではない。スタジアムのエレベーターが突然故障して同僚記者が10分近くも閉じ込められたり、選手やメディア向け宿泊施設でお湯が出なかったり停電したり……。幸運にもそうしたアクシデントに出遭わなかったからかもしれないが、私自身がリオで最

も印象に残ったのはたくさんの「笑顔」だ。

五輪期間中、4年後の東京五輪に向けて実地研修していた東京都職員らが「4年後にあれを日本人ができるかどうか、実は一番心配なんだよね」と語っていたのは、各国の言葉で挨拶しながら満面の笑みを振りまく係員たちの姿だ。会場入り口のセキュリティーチェックで長蛇の列にイライラしている時も、サンバのリズムで体を揺らしながら「オハヨー！」と声を掛けられると、誰もが自然と笑顔になっていた。聞けば事前に教育を受けていたわけではなく、「日本人は『オハヨー』と話しかけると喜ぶよ」「イタリア語では『ボンジョルノ』だよ」と各国記者から教えられるうちに、案内係が「マルチリンガル、へ進化を遂げたい」。

整った設備や緻密な準備があるに越したことはないが、人の心を動かすのは、やはり人の温もりなのだろう。選手たちの感動的なパフォーマンスに国籍関係なく拍手を送り、試合の妙味を損なう反則などには容赦なくブーイングを飛ばす観客の流儀も含めて、カリオカたちの血の通った五輪の後味は爽快だった。

本池英人

(日本経済新聞運動部記者。01年入社、05年から現職)

遺伝学者による ブラジル人種論の新展開

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

セルジオ・ダニロ・
ペーナ教授
© em.com.br



「もしブラジルが、ユニバーサルな文化の昂進に何がしか有益な寄与をしたといえるのであれば、それは人種混淆を通じて、であろう。すなわち、この人種混淆はヒューマニズムという重層における我々の存在を明示するものであり、人類に対する我々の最大の貢献である。」

これは国民作家ジョルジ・アマード（1912～2001）が、数多い小説群のなかでも自分で一番気に入っていると語っていた『Tenda dos Milagres(奇蹟の家)』（1969年、タイトルは店の屋号からきているので、『ミラクル堂』あたりが適訳かもしれない）の主人公ペドロ・アルカンジョが発表した論文「バイア家族における混血状況についてのメモ」の一節であるが、いうまでもなくアルカンジョという架空の学者を通じてアマード自身の思念を語っていることは明らかである。

文学活動を通じてブラジルの価値を追求し人種混淆をポジティブに捉えた作家アマードの指摘を待つまでもなく、ブラジルは多人種多民族の国であるが、実際の人種別人口構成比はどうなっているだろうか。改めて、おさらいしてみよう。

統計社会学者たちが、客観データとして信頼できると判断しているのが、2008年にフォリャ・デ・サンパウロ紙が行った全国面接調査（対象：2900人）だ。これによれば、白人 37% 褐色 36% 黒人 14% 暗褐色 4% インディオ 5% 黄色 3%、となっている。すなわち、広義の黒人層が全人口の 54% を占める、という調査結果は、ブラジルの実態を反映していると専門家は考えているのだ。

こうした人種混淆状況を社会科学の視点から分析・評価する試みは、1930年代から、G・フレイレやD・リベイロといった社会人類学者らによってなされてきたが、自然科学とりわけ遺伝学から科学的なアプローチが行われるようになったのは、つい最近のことではない。

ブラジルの遺伝学者のなかでも、科学的なデータに基づいて、一般読者向けにも人種問題について発言を続けているのが、セルジオ・ダニロ・ペーナ教授だ。カナダのマニトバ大学で博士号（遺伝学）を修得し、現在はミナスジェライス連邦大学生化学・免疫学部教授として国際的に知られるペーナ教授が有名になったのは、共著『Homo Brasilis』を2002年に刊行してからだろう。この著は「ブラジル遺伝学会」が開催した国際シンポの成果をまとめたもので、ブラジル人が

どのように形成されてきたか、を遺伝学、歴史学、人類学、社会学、言語学などから解明しようという試みの書であった。

そんなペーナ教授が総合週刊誌ヴェージャ（2016年8月10日号）のコラムにいささかボレミックな論稿を発表しているので、主要部分を訳出してみたい。

「ミナスジェライス連邦大学の我々の調査グループは、DNA 遺伝マーカーを使って、ブラジル人—白人、混血褐色人、黒人—の祖先の遺伝子研究を過去 20 年にわたって行ってきた。この研究が示すところでは、白人と自己申告する人たちの圧倒的多数は、父系（註：父から子への Y 染色体）遺伝子はヨーロッパ起源である。一方、母系（註：ミトコンドリア DNA）遺伝子に目を向けると、何とも均等に分配された数値となっているが、33% が先住インディオ、28% がアフリカ、39% がヨーロッパ、を起源としている。この数値は全国平均値であり、広大なブラジルでは地域差があることも事実である。この研究データによれば、ブラジルの白人層の形成においては、遺伝子のフローは性的には不均整であった。すなわち、ヨーロッパ系遺伝子は父親経由で、先住インディオ系とアフリカ系の遺伝子の大部分は母親経由でブラジル人に伝わったのだ。

別の言い方でいけば、ブラジルの白人は、ヨーロッパ系男子とアフリカないしインディオ起源の女性との間の性的結合によって形成されたのである。何世紀にも亘るこの混淆の結果、白人と自己申告しているブラジル人三人のうちの二人が、母方との関係ではアフリカ系ないし先住インディオ系の子孫、となっている。さらには、黒人と自己申告している者の半分以上が、父方のルーツがヨーロッパ系なのである。」

この論稿は、ブラジル政府が進めてきている人種差別是正措置の一環である、公務員試験への 20% 黒人枠について、その選別試験での黒人判定の非科学性を論じたものだ。「遺伝学という科学的立場からすると、人種というものは存在しない。（人種が存在するのは、社会的ないし文化的な文脈においてだ）」と考えるペーナ教授にとっては、人種を決定するのは自己申告しかないとなる。

ちなみに、ペーナ教授が、ご自身の遺伝子検査をしたところ、ご先祖が先住インディオであることを「発見」し、「自分が“より根付いた”ブラジル人であることを自覚した」由だ。



テメル新大統領就任スピーチ要旨抜粋

8月31日、弾劾法廷によりルセーフ前大統領の罷免が決定したことに伴い、同日夕刻、下院本会議場にてテメル新大統領の就任式が行われた。就任宣言の要旨は下記の通り。

1. 連邦議会において民主的かつ透明性ある決定が下され、自分は大統領に就任する。ブラジルに期待と信頼の回復をもたらす時が来た。国を団結させ、党利より国益を大切にする時だ。
2. ブラジル経済は深刻な危機にある。失業者は1200万人に上り、財政赤字は1700億リアルを超える。ブラジル経済の力を取り戻し、再び軌道に乗せることを約束する。行政の効率化、成長回復、雇用創出、法的安定性、社会プログラムの拡大、国の和解を図りたい。
3. 現下の債務に照らし、支出を抑制する必要がある。政府支出に上限を設けるための憲法改正案を議会に提出する。省庁数も削減する。
4. 退職者への支払いを確保するため、社会福祉の改革も必要。高齢者を守りつつ若い世代を傷つけることのないシステムを作りたい。
5. 既に最悪な状況は過ぎ去った。経済指標はブラジルの信頼回復の予兆を見せている。世界中の起業家や投資家にブラジルが良いビジネス環境を有していることを示し、投資家にはブラジル政治の安定と法的安定性を保証しなければならない。
6. 既存の雇用を守りつつ新たな雇用を創出するため、労働法を近代化する必要がある。国の機敏な対応が求められる。労働者や雇用主、地方の生産者を支援する必要がある。公共サービスの質を高め、よりスマートにするための施策を採らなければならない。
7. 社会プログラムは現在も拡大させている。「ボルサ・ファミリア」の価値を高め、「ミニャ・カーザ、ミニャ・ヴィダ（我が家、我が人生）」は活性化されている。
8. ブラジル社会のあらゆる部門と民主的な対話を行うとの約束を繰り返したい。行政、立法、司法の三権独立を尊重したい。秩序と進歩は共にあることを喚起したい。共にブラジルを改善していこう。ブラジルは望む時には変わる。そのことを信じて欲しい。

10月2日の地方（市長・市議会議員）選挙結果

10月2日（日）の地方選挙（一次）で有効票の過半数を得られなかった92都市では、10月30日に一位候補

と二位候補のあいだで決選投票が行われるが、政治動向の大勢は一次選挙で判明した。

政党別の獲得首長数の順位では、第一位はテメル大統領のPMDB(ブラジル民主運動党)で951都市、第二位はPSDB(ブラジル社会民主党)で800都市だが、前回2012年の695から大きく伸長した。ルセーフ前大統領のPT(労働者党)は、前回の638都市から256都市へと激減し、州都で当選したのはアクレ州リオブランコ市のみで、党の順位では10位となってしまった。

統治する選挙民数でみると、最大政党は、3800万人のPSDBで前回と比較すれば45%増、第二位のPMDBは2500万人、凋落したPTは、前回の3800万人から600万人へとなくなってしまった。これは、サンパウロなどの大都市でPSDB候補者が当選したからだ。サンパウロでは、新人候補ジョアン・ドリャが有効票の53.3%を獲得し、第二位のPT候補、ハダジ現市長は16.7%でしかなかった。こうした選挙結果から、多くのメディアが、PSDBの勝利、と報道している。今回の地方選挙の特徴としては、1) PT(労働者党)の予想以上の凋落、とともに、2) リオ、サンパウロ、クリチバ、ベロオリゾンテなどの大都市で無効票が当選者得票数を上回った、という事実が指摘されている。義務投票制における白票・無効票は、全ての政党に対する不信感、政治全般への失望を意味しており、この事実の解釈を巡って様々な議論が起きている。

9月新車販売数、前年同月比20.1%減

1月から9月までの累計新車販売数は、151万台となり、前年同期比22.8%マイナスとなっている。Fenabrave(全国自動車販売業者連盟)は、今年通年の販売台数予想を若干下方修正し、190万台と200万台割れを予想するに至っている。

2013年のピーク時、年間販売台数は376万台であったから、ほぼ半減というのが、現在のブラジル自動車市場となっている。

9月の貿易黒字、過去10年間で最大

MDIC(開発商工省)の発表によれば、9月の貿易黒字38億ドルは、過去10年間で最高額となった。1月から9月までの累計輸出額1,393.6億ドルは前年同期比マイナス4.6%、累計輸入額は1,032億ドルと前年同期比で23.9%もの大幅減となり、この結果、9月までの累計貿易黒字は362億ドルとなっている。



新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『創造か死か』

(A・オッペンハイマー著、渡邊尚人訳)

ラテンアメリカに希望を生む革新の5つの鍵、という副題を持つ本書は、前著『ラテンアメリカの教育戦略』に続くピューリッツァー賞受賞ジャーナリストによる中南米経済活性化への“憂国の書”である。ブラジルやアルゼンチンの経済発展を阻害する官僚主義、教育全般の低迷、等々を具体的な事例研究を通じて記述し、ラテンアメリカのジレンマは「資本主義か社会主義か」ではなく、「創造か死か」なのだと。反論の書がでてほしいものだが。

(明石書店 2016年4月 383頁 3,800円＋税)

『越境と連動の日系移民教育史』

(根川幸男 / 井上章一編著)

国際日本文化研究センターの共同研究「日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究—ブラジル・フィリピン・

ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に」の成果を踏まえた諸論稿を所収している学術書だが、従来の移民史研究にない斬新な視点からの論稿がいくつも収められている。「日本人の地球規模の移動から見える日本帝国の勢力圏と非勢力圏の連動」を感得した根川氏の真摯な学際的研究姿勢から学ぶべきことは少なくない。

(ミネルヴァ書房 2016年6月 466頁 8,000円＋税)

『ブラジル日系美術史』(田中慎二著)

日本移民史料館内のイラストやデザインを担当した美術家にして人文研理事として研究叢書などの執筆でも活躍した田中氏は、労作『移民画家・半田知雄—その生涯』を脱稿したあと、日系美術史の記録に注力した。その成果が本書だが、日系画壇の黎明期、聖美会の創立、戦争中の苦闘、戦後美術活動の再開、日系画壇の新しい波、サンパウロ工芸作家協会の発足、といった日系美術史を見事に叙述している。本誌P10にも寄稿していただいた。

(サンパウロ人文科学研究所 2016年6月 335頁ブラジルで50レアル、日本での販売は人文研日本支部が対応する見込み)

『リオデジャネイロ歴史紀行』

(内藤陽介著)

郵便学者によるリオ歴史物語。現地取材を踏まえたうえで、郵便切手を題材に、リオ各地の歴史背景を語っていく。世界各国に関する歴史啓蒙書を多数出版している著者だけに語り口はなめらかであり、リオの魅力が行間から漂ってくる。但し、カチ組マケ組抗争の説明はなんと表層的だし、「1502年には、ユダヤ人の集団がブラジルに移住し、商品としてサトウキビを栽培していた」なんてトンデモ記述もあり。座布団二枚回収！というところ。

(えにし書房 2016年8月 190頁 2,700円＋税)

『原家の砂時計』(篠田顕子著)

同時通訳で活躍していた著者が、2011年3月の東日本大震災・原発事故のあとを食って国際会議がキャンセルとなり、無仕事状態になって取り組んだノンフィクション作品だが、旧知の原家をブエノスアイレスに訪ねてからの緻密なリサーチはプロの仕事だ。現在85歳の原恵子を中心に、アルゼンチン近現代史のなかで日系アイデンティティーを巡って葛藤する息子たち(二世)や孫たち(三世)が活写されている。ブラジル関係者にもお薦め。

(悠書館 2016年8月 244頁 2,000円＋税)

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会ホームページお申し込みフォームにてお願いします。

11/2

呉屋春美 ブラジル日本文化福祉協会会長 ランチョンミーティング

演題：文協会長として顧みて (仮題)

「ブラジル日本文化福祉協会」は、創設以来60年以上にわたって日系社会の団結を図り、ブラジルにおける日本文化の普及活動をしてきましたが、昨年第12代文協会長に選出された呉屋春美氏をお迎えし、今後の抱負、個人史などを語って頂きます。

日時：2016年11月2日(水) 12:00～14:00

会費：会員 3,000円 / 非会員 3,500円

場所：シーボニアメンスクラブ

住所：東京都千代田区内幸町2-1-4日比谷中日ビル1F

電話：03-3503-6301

交通：地下鉄千代田線「霞が関」駅C4番出口 徒歩2分
都営地下鉄三田線「内幸町」駅 A7番出口 徒歩3分

12/9

日本ブラジル中協会 年末フェスタ 2016

～ブラジル音楽を楽しみながらの、ブラジル好きのアミーゴの楽しい夕べ～

日本ブラジル中協会主催の恒例の忘年会を開催！美味しい料理とブラジル音楽演奏を楽しみながら、楽しく語り合しましょう。

今年も、司会にはNikkeiモーニングプラス(BSジャパン)でお馴染みの榎戸教子キャスター。サンバなどの演奏には、日本のブラジル音楽の父と言われる、フランシス・シルバ率いるCemCruzeiroをお迎えします。

日時：2016年12月9日(金) 18:30～

場所：Park Side Tables

住所：東京都千代田区紀尾井町3-12 紀尾井町ビル2F

アクセス：東京メトロ有楽町線 麴町駅より徒歩3分

※その他、詳細はホームページにてご案内します。



——— 皆様のご入会、心よりお待ちしております ———

法人・個人

新規会員募集中

会員数 2016年10月現在
法人会員 約122社
個人会員 約276名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お申込みはこちら

《日本ブラジル中央協会公式HP》

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

!!「びっくり豆知識」!!

メダルの威力がブラジルを生き返らせた

リオ・パラリンピックのメダルは揺らすと音がする。カタカタと。金、銀、銅の色によって音を変えているのがブラジル流の粋なはからい。その静かな音が9月7日開会のパラリンピックになって次々に鳴り出し、ブラジルを豹変させた。

その気配は8月5日スタートのリオ五輪からあった。「正規軍」の五輪でブラジルは金7、銀6、銅6の計19個のメダルを獲った。世界では13位で辛うじて前回ロンドン大会を上回った。サッカー決勝でネイマールを擁して宿敵ドイツに勝ったことが大きい。14年ワールドカップの惨敗で下を向いていたブラジル人は最も必要な「金」を獲得し自信を取り戻した。

余勢を駆ってパラリンピックに移ったら、開催国の有利さを生かしまるで別チームのように躍動した。ブラジルの治安、ウイルス、政治混乱、経済危機、すべて吹き飛ばすメダルラッシュだ。

ブラジルのパラメダル数は急増する。金14個、銀29個、銅29個、合計72個を量産し、世界順位は8位まで駆け上がった。ブラジルを熱狂させたのが競泳のスーパースター、ダニエル・ジアス君。1人で金4つを含む9個のメダルを荒稼ぎした。また5人制の「ブラサカ」(ブライントサッカー)は4

連覇の偉業を達成、サッカー王国の勲章を守った。

ちなみに日本はリオ五輪では過去最高の41個のメダルをとって沸き返ったが、パラになったら1964年の東京大会以来初めて金メダルゼロ(銀、銅合計では24個)に終わった。世界順位は64位だった。世界の障害者スポーツへの関心が高まり、レベルが上がったためだ。今回はロシアがドーピング問題で排除されたが、それでも159カ国から4300人が参加した。

世界一を争う大会だから、たかがメダルと言う人はいないだろう。そのメダルラッシュが沈滞ムードのブラジルを生き返らせたとすれば、ラッキーとしか言いようがない。今大会のメダリストは口をそろえて「重い!」と言う。精神的な重さではなく実際に500グラムあり、ロンドン大会より100グラムも重い。オリ・パラとも同じ重さだが、パラのメダルは表面に小石でできた歩道をイメージした点字のような凹凸がある。中には金属製の球があり、視覚障害者にもわかるように喜びの音を鳴らす。

至福、名誉、誇り?メダルで天狗になる人もいるが、次の活力にする人も多いはず。人を変え、国さえ変えるメダルは“魔物”である。(W)

BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT 食べ放題

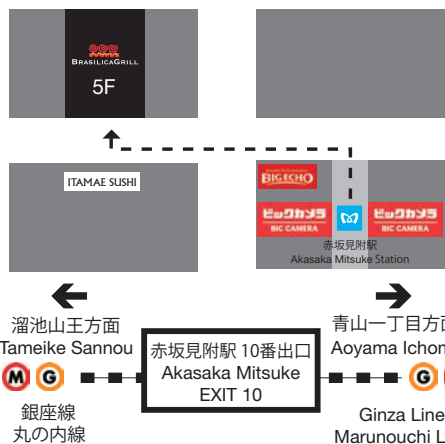
予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分

赤坂駅
徒歩6分

永田町駅
徒歩6分





スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

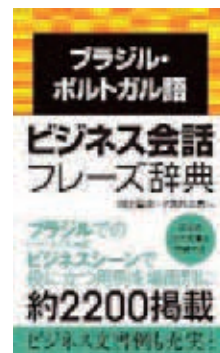
www.hispanica-academia.org

- ・通学
- ・通信添削
- ・オンライン※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

- ・中南米経済速報（週刊）
- ・政治・治安情報“CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限引き出すレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル 1F（銀座線・南北線「溜池山王」8番 駅出口前）

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で

欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、

赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

「講師任せにはしない」

現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階
TEL03-4360-8627
お問い合わせは E-mail: brasias@kanwajuku.com HP: <http://brasias-j.com/>

37年間
南米一筋

驚き！ 感動！！

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。

航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、タム航空、ラン航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。

観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル

(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号

社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員

TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail : info@alfainter.co.jp



亀は万年、鉄は永遠。



鉄は、機能的な素材です。強く長寿命でどんな形もつくりことができ、古くなったら取り替えも利く。スクラップになっても、何度でも新しい鉄に生まれ変わります。新日鉄住金は、鉄のライフサイクルを見つめ、より錆びにくい鉄など、さまざまな可能性を追求。原材料から環境負荷の少ないものを選び、多くのエコプロダクツも開発してきました。一説では、鉄はその強度もまだ20%程度しか発揮されていないといわれています。もっとロングライフで、もっとエコロジーな鉄へ。私たちは世界最高の技術力で、秘められた鉄の可能性を引き出していきます。

鉄の「可能性」を考える。私たちはライフサイクルで環境を考えます。

世界の鉄へ しんにつつすみきん

 新日鐵住金